

デ・サンデ「天正遣欧使節見聞対話録」

短期大学部教授 河合忠信

東西交渉関係史料といえば通例西欧人による日本、アジア研究・旅行記等がその主体を占め、邦人による西欧研究・見聞記については鎖国という厳しい歴史的事実によりこの分野の文献に乏しく、殆ど今日までとりあげられたことがない。近畿大学中央図書館の重要特殊コレクションの一つである東西交渉史関係文献についてもその例にもれず、ケンペル「日本誌」、シーボルト「日本」等すべて西欧人による日本、アジア研究や旅行記によって構成されていたのが今日までの実情であった。

ところで本館が昨年5月収蔵した表題書、デ・サンデ「天正遣欧使節見聞対話録」は数少ない邦人による西欧見聞記のうちで、出版年代が最も古い海外で刊行された欧文文献であるばかりでなく、我が国の文化史上いろんな問題を提起する書でもあり、更に全世界に伝存するもの十数点、完本は十点に満たぬ貴重な文献でもある。以下において本書の成立事情、文化史的意義など解説・紹介してみよう。

天正10年2月20日(1582)、九州のきりしたん大名大友宗麟、有馬晴信、大村純忠より4人の少年使節がローマ教皇庁へ派遣された史実はよく知られている。この当時としては破天荒な事業を計画し、実行したのがザビエルに次いで日本でのキリスト教伝道に貢献した耶蘇会東洋巡察師アレッサンドロ・ウアリニャーノ師であった。彼は使節一行をゴアで見送りその地に滞在一行の帰国を待ったが、少年使節はローマ教皇庁への日本代表使節として当時の教皇グレゴリオ十三世の謁見をはじめ、イタリア、ポルトガル、スペイン諸国を歴訪、各地で国賓として最高級の礼遇をうけ、また国家的、宗教的な式典・行事に参列し、出発より8年余、途中ゴア、マカオを経て天正18年7月21日(1590)長崎に帰着した。

一行をゴアで迎えたウアリニャーノ師は、使節関係の公式記録、少年使節達の日記をもとに、正使の1人千々石ミゲルを中心に彼等が日本に残ったミゲルの従弟達の間に答えて、ヨーロッパでの自分達の見聞を語るという対話形式の見聞録をスペイン語で編み、それをラテン語に優れていた耶蘇会中国伝道の長老デ・サンデ師に託してラテン語に翻訳、使節と共に日本に将来された洋式印刷機・活字を用いて1590年マカオで刊行したのが本書である。



本書の正確な書名は「DE MISSIONE / LEGATORVM IAPONEN / sium ad Romanam curiam, rebusq; in / Europa, ac toto itinere animaduersis / DIALOGVS / EX EPHEMERIDE IPS ORVM LEGATORVM COL / LECTVS, & IN SERMONEM LATINVM VERSVS / ad Eduardo de Sande

Sacerdote Societatis / IESV./ (vignette) /
In Macaensi portu Sinici regni in domo /
Societatis IESV. Anno 1590. [日本使節たちのローマ教皇庁への派遣、ならびにヨーロッパ及び全旅程において見聞せしことなどについての対話。使節たちの日記より集録し、イエズス会の司祭ドウアルテ・デ・サンデによってラテン語に翻訳された。シナ王国マカオ港なるイエズス会の館にて、当局と上司の出版認可を得て、1590年]と扉にある。

内容は「出版認可状1-2」「巡察使序言」について本文「対話1-34」よりなり、うちサンデ師が加えた「対話33 シナ王国」を除き、すべて少年使節達とミゲルの従弟との対話・問答形式をとった彼等使節のヨーロッパ・キリスト教界とヨーロッパ社会一般の先進性に対する賛美・嘆美録、見聞録である。また叙述にラテン語を用いたのは、耶蘇会の学林での日本人学生のラテン語学習のテキストにあてようとしたためといわれている。

ところで本書は上述のごとく我が国の文化史上興味ある問題を提起する書といえる。第一に、本書は16世紀のヨーロッパ、特にその最盛期にあった南欧の事情、宗教界をはじめ、政治、軍事、学術、技術の全般について詳説するだけでなく、当時の世界地理の概要、天文学とその応用である遠洋航海術をも述べ、ヨーロッパの科学の進歩とその応用について述べていることである。若しこの書がいち早く邦訳されていたら、また日本の学林でテキストとして使用されていたら、幕末の洋学にさきがけ日本人の間に海外知識・科学知識が広く普及し、おそらくそれ以後の我が国の文化、政治の歴史になんらかの変更が生じたかもしれない。また国家使節として恵まれた4人の少年が帰国後彼等がその知見を活かす十分な場を与えられていたら、我が国の学術・技術の進歩の歩みはもっと早かったかもしれない。

更に本書は我が国出版文化史上ユニークな位置を占める「きりしたん版」、即ち使節一行と共に将来された洋式印刷機・活字により刊行された一連の印刷物の先駆をなす書でもある。

さて近畿大学本だが、白茶色の堅牢なヴェラ

ムで装丁された原装本。縦20cm。横13.5cm。の八つ折本。背に黒インクでLEGAT. IAPON.の標題が記されているが薄れてようやく判読しうる程度。全222葉。ページ付は最初の4葉はなく、本文の始め第5葉から始まり、本文末尾P.412で終わるが、P.255-258までが重複し、その埋合せにP.265の次が269となっている。本文のあとにページ付のない索引・正誤表12葉がつづく。刷面は縦15.9cm。横10.5cm。35行一段組。柱は本文前の4葉はなく、本文左ページにDE MISSIONE LEGA. IAPON (日本使節の派遣について)、右ページにCOLLOQVIVM PRIMVM-TRIGESIMVM QVARIVM (対話1-34)とある。各ページ下の中央に折記号が扉よりA-Z⁴Aa-Ii⁴Kk⁶Ll⁴Xx⁴a-f⁴とあり、索引はA-C⁴となっている。料紙は唐紙。印刷は鮮明とはいえないが、判読しにくい箇所も少ないが、保存状態すこぶる良好な美本、完本である。なお我が国においては近畿大学本の他に天理本一本が存在するのみである。

また本書の複製としては昭和51年「天理図書館蔵きりしたん版集成」の一冊としての天理本の複製本が、また邦訳は昭和44年、泉井久之助博士による詳細な解説を付した「デ・サンデ天正遣欧使節記」(新異国叢書5)が刊行されている。